

『失われた言葉を求めて』 について

南嘉久

二〇〇二年の夏に私は自分史をベースとした『失われた言葉を求めて』という本を出すことができた。被爆者である父のことと私の関わりを書いたものである。

父は長崎原爆で幼い子どもたち四人を失い、自らも原爆症のために一生苦しんだ。その父が私に原爆のことを話したことが三度ほどあった。

一番初めは私が小学校五、六年生の頃だったか、父が長崎原爆の写真集を見せながらの話であった。原爆の焦熱と猛火の中で黒く焼け焦げ、頭蓋骨まで露になった人がいた。「こんなふうにして、英子たちが死んどったぞ。」と父がその写真のすごさに息を呑んでいた私にポツリと話した。父はさらにかろうじて数日生き延びた次男寛之のことを語った。

「ひろ坊がね、死ぬほんの手前だったけど、夜中に目をあけてね、『おとうさん、今、何時？』そう言って死んだよ。」

自分たち兄弟は、その時から、父がひろ坊の今際の際の言葉を

何度も言うのを聞いて育ったのだった。父の悲しみ、痛みの深さも思い知らぬままに。

二度目は大学二年の時だったか、原水爆禁止世界大会の長崎集會に参加した時に家に寄った私に父がポツリと言った。「原水禁大会とか平和行進とか年に一度おきまりのように外から来て騒がんでもよか。長崎の被爆者は原爆の日には、静かに原爆で亡くなった人たちに祈りを捧げたかといふ。」ひろ坊たちのことを知っていた私は黙って聞いていた。私は日頃封印していた父の悲痛な思いの塊かたまりに触れたようだった。

三度目は私が二十歳になった年の長崎原爆の夜のことである。帰省して夕食の後、父が私に真面目な表情で言った。「今日話したときたいことがある」父が生涯でたった一度私に詳しい原爆の話をしたのだった。国鉄長崎機関区で被爆した父が燃え焦って熱い原野を子どもたちを探し求め、ようやく見つけたひろ坊たちも息を引き取っていった話であつたらう。ただ私が痛恨に思つたのは、たった一度だけ父が思いを込めて私に語つたその話をどのようなものだったか私は完全に忘れてしまったのだった。私は自分の未熟さを激しく責めた。

大学卒業後私は生協で働き出し、結婚をし、二人の子どももできた。生協の平和活動にも熱心に参加していった。その私の心の奥底には父が幼い私たちに何度も語つた『おとうさん、今、何時？』というひろ坊の言葉があつた。私が二人の子の父となる中で心の奥底の言葉はいつか育つていったのだろう。父が生涯にただ一度詳しく語つて思い出すこともできない父の話（私にとつての父の「失われ

た言葉」とその奥にある父の思いを私は自分のうちに取り戻さねばならないと決意した。私は『長崎原爆戦災誌』をはじめ多くの原爆の本を読み、父の職場と元同僚を訪ね、手紙を出し、父たちの家の跡を探し求めた。

原爆は爆風や熱線や放射線というそのすさまじい威力だけでなく何よりも生きた人間の心身に与えた悲惨さが語られなければならなかった。原爆の人間の悲惨さを深く理解するためには、私自身の人間的成長が必要であった。原爆の人間の悲惨さを理解することは父を深く理解していくことでもあった。

被爆者の父の苦しみを私は知る。精神的にも肉体的にも頑健な父であったが、原爆症のため死にかかった頃「こんなに苦しいものなら線路に這って行って死にたいと思った」という。永井隆の本を後で読んで「原子放射線によつて引き起こされる原子病の苦しみは、生身をちぎるばかりの苦しみがある」と知つて私は父の苦しみを少しは思い量つた。

父の悲しみ痛む思いを私は知る。原爆投下の前に長い闘病生活の果てに妻を亡くし、残された五人の幼い子どもたちを育てる父がいた。「・・・長女の葉子が小学校二年ぐらいから母親が病気になるたもんですから、六年まで結局四年半ですわね、まあ小さいそういう幼い手で才覚をしぼりながら夕御飯のしたくをしてくれましたけれども、それも今から考えれば本当に簡単なものですわね。そしてまあ、夕方私が遅く帰りますと子どもたちが全部私のそばに寄つてお膳を囲むようにして、そして一番すそつ子がカタコトまじりに『おとうちゃん、うちたちやおかゆの水のほうだけいだいておとうちゃんに実のところ残しといたとヨ』と言つておりました。そう

ねと言つて私が頭をさすりながらやつたのが今でも本当に思い出されますね。・・・」（ラジオ・ドキュメントでの父の話）

父と幼い子たちのささやかな幸せの光景があつたのだろう。その幸せと子どもたちのいのちを原爆は奪つた。爆心地からわずか五百メートルの距離にあつた木造の鉄道官舎などひとたまりもなかった。すさまじい爆風と熱線を受け即死した七歳の啓子と五歳の英子。

家の前の浦上川に飛び込んだ後、荒れ狂う紅蓮の炎から逃げ延びた十三歳の葉子と十歳の寛之。ようやく生きながらえた二人にも放射線が体の深部から細胞を破壊していった。父は被爆して瀕死の人たちを救援する列車の運行指揮を原爆投下後の極限状況の中で執りながら夜おそくまで原子野を探し回つた。長与の救援所に横たえられた息絶え々々の葉子は「おとうちゃんはまだでしょうか？」とか細い声で言つて父の到着を今か今かと待つていたが、父が駆けつける三十分前に手を胸に当てたまま息を引き取つた。冷たい体となつた葉子を抱きしめて慟哭する父がいた。父はひろ坊を護国神社の防空壕の奥でようやく見つけ出したが、そのひろ坊も黒い便を出して十六日の夜に死んだ。今際の際に父にかけた短い言葉『おとうさん、今、何時？』とその時のひろ坊の表情が父の胸の底に一生残つた。

父は戦後再婚した母との間に四人の子どもたちをもうけた。父の愛情をたっぷり受けて私たちは育つた。父は戦争を知らない自分たち兄弟が成長していくその顔に、いつまでも年取ることのないひろ坊たちの幼顔を重ね合わせていたのだろう。

父は私たちに原爆で死んだ四人に代わるいのちの願いを込めたの

だろう。被爆二世の私たちは父にとって生きる希望の象徴であったろう。

私のいのちにもある被爆者である父の思いを私は今知っている。自他のいのちへの深いとおしみを私は今感じることが出来る。他者への感受性こそほんとうに大切なことだと学び成長もした。被爆二世の一人として平和への深い思いを私は私なりにこれから語っていく。何より、すべてのいのちのおしさを深く感じ、私のいのちの

豊饒な可能性を求め、出会うすべてのことから学び生きていこう。路傍の草花にも優しくまなざしを注ぎ、そよぐ風にも心を震わせ

て。
(なお、この『失われた言葉を求めて』の本についての発表報告を第五回原爆文学研究会で行いました。)